

宇治茶の煎茶生産史上の核をなす地域です。

奥山田、湯屋谷は、鷲峰山北麓の谷筋に展開する集落で、奥山田大福谷で鎌倉時代初期に茶栽培が始められたと言われ、湯屋谷では永谷宗円によって青製煎茶製法が開発されました。宗円は江戸への販路開拓も成し遂げたため、谷深い地ながら茶農家だけでなく茶問屋も軒を連ねる集落形態が生まれました。茶園は谷沿いの水田脇に設けられた原形というべき茶園景観にはじまり、戦後には大福に大規模な山なり茶園が開かれ、寒暖の差の大きい気候を活かした香りのよい煎茶が生産されています。

郷之口は、陸上及び水上交通の結節点に発達した茶問屋街で、間口の狭い町家形式を持つ明治以降の茶問屋が建ち並びます。



奥山田



湯屋谷



湯屋谷



郷之口

・集落と茶園の織りなす良好な文化的景観

和束町域

・伝統的民家に加え茶工場が多く残り、宇治茶の生産集落としての特徴をよく示し、宇治茶の生産集落を代表する地区

現在、京都府内でもっとも茶生産量が多く、京都府を代表する茶生産地です。鎌倉時代に鷲峰山山麓に茶を栽培したのが始まりと言われ、16世紀後期には、原山に茶園を開いた記録や宇治製法が開発されてから約10年後に原山に伝えられたとあるなど、古くからの煎茶産地です。明治以降、集落裏側の山腹を山なりに開墾するなかで一大産地へと展開していききました。



石寺



釜塚



原山



原山



撰原

湯船は、茶工場は住居施設を2階に付設するなど独特の外観と建築構成を示し、規模も大きく集落景観において重要な位置をしめています。しかも、茶工場に加え、茶畑での農作業に不可欠な雪隠や風呂場、あるいは井戸屋形などが屋敷の周囲に配置されていることも、集落景観を特有のものにしています。



湯船



湯船

南山城村域

明治以降における宇治茶生産の歴史と独特の風土が織りなす文化的景観

木津川水運を背景に、幕末からの煎茶の輸出を契機として、茶園を徐々に拡大してきた生産地です。田山、高尾では、縦畝の茶園景観が際立ちます。山中に山なりに開墾された緩勾配の茶園が点在し、それらを縫うように畝が縦断する様は、宇治茶生産の景観中でも特筆すべき眺めです。縦畝は乗用型摘採機の導入にも適しており、生産の合理化と伝統的な景観とが両立してもいます。

また、童仙房は標高500mの山間の平坦地に明治初期に開墾された集落で、水田と山なり茶園が対をなす、素朴な景観が残ります。



高尾



高尾



田山



童仙房

木津川市域

自然、歴史、生業に特徴的な要素を備える文化的景観

木津川水運を利用した交通の結節点である地の利を活かした茶問屋街が形成されています。綿業を商っていた家々が、幕末からの煎茶の輸出拡大にともない、順次茶問屋へと転換し、発展したもので、奈良街道に沿って広い間口を有する茶問屋が建ち並び通り景観を見せます。現存する茶問屋の建物は、幕末建設のものから、販路が国内向けとなった大正、昭和初期に建設されたものまで多様に残ります。広い間口を活かして長屋門を構え、中央の庭を茶工場と主屋が囲む、明治以降に発展した茶問屋らしい合理的な配置をみせます。



上狛



上狛



上狛



上狛